

三大寺家旧蔵「高野大師行状絵」考

—總持寺本を中心に—

塩* 出 貴美子

要 旨

本絵巻は、本来十巻で構成されていたと推定される絵巻の前半五巻にあたる。弘法大師伝を主題とする同種絵巻中、十巻本と呼称される系統に分類されるものであるが、構成などに異同が多く、その異本的存在とされてきた。筆者は、先に、本絵巻全体に関わるいくつかの問題点と第一巻の図様を検討し、その十巻本系統における位置付け、および他系統への影響について考察を行った。本稿はその続編であり、前回触れなかった料紙番号に関する問題と第二巻の図様を検討し、前回の結論に補足を加えようとするものである。

はじめに

本稿は、先に発表した「三大寺家旧蔵『高野大師行状絵』考—逸翁美術館本を中心に—」の続編である。前稿では、まず、弘法大師伝を主題とする絵巻諸本を概観した後、三大寺家旧蔵の「高野大師行状絵」第一巻から第五巻までと、これと本来一具であったボストン美術館蔵の同第七巻（一括してA本と称する）を取り上げ、（一）現状、（二）内題・目次・標題、（三）詞書、（四）構成、以上四点から検討を加えた。次に、現在、逸翁美術館が所蔵する第一巻の図様を、白鶴美術

館蔵「高野大師行状図画」、および久松家旧蔵・堂本家蔵「弘法大師伝絵巻」（B本と称する）と比較した。右の結果、A本の成立については、基本的には地藏院本↓白鶴美術館本↓A本という連関が認められること、しかし部分的には白鶴美術館本よりも六巻本系統の地藏院蔵「高野大師行状図画」あるいはB本からと思われる影響が窺われること、またA本独自のものと思われる改変も加えられていることなどを指摘し、「白鶴美術館本が地藏院本（の原本）の比較的忠実な増補本であったのに対し、A本は同じ③系統（十巻本系統）の作品でありながら、他本の要素を取り込み、さらに独自の改変を加えた改訂版」として位置付けられることを述べた。そして最後に、後世への影響として、A本と東寺蔵「弘法大師行状絵詞」の両者にだけ共通する図様があることから、東寺本が依拠した先行本の一つにA本を加えることができるかと推論した。

さて、本稿は前稿を引き継ぎ、現在、東京の西新井大師總持寺が所蔵する第二巻の図様を検討しようとするものである。そこから導き出される結論は、実は前稿と特に変わるものではないが、第二巻は第一巻以上に独自性が強く、また東寺本との相似も顕著であるので、改めて検討する価値は充分にあると考える。なお、その前に、前稿で書き漏らした料紙番号に関する問題を検討し、A本の一部に欠失があるこ

とを明らかにしておく。^{（註）}これは、A本についての考察全体の中では、先述の「(四)構成」の次に「(五)料紙番号」として加えられるべきものである。

一 「高野大師行状絵」の問題点—料紙番号—

A本には、第一巻と第二巻の料紙右上隅の裏面、および第三巻の料紙左上隅の表面に、小さな漢数字で通し番号が墨書されている（以下、料紙番号と称する）。書き入れられた時期は不明であるが、三巻とも欠番があることから、現状への改装以前であることは明らかである。^{（註）}この料紙番号は、欠番が料紙の欠失を示す場合があること、また最終紙の確認ができること、以上二点において、A本の現状に重要な問題を提起する。以下、第一巻から順に検討してみよう。

〈第一巻〉 現状は三十二紙からなる。各料紙の横の長さは四十五・八〜四十九・一センチであり、大半は四十八センチ前後である。長短に多少の差があるが、この程度は装丁、あるいは改装時に生じる誤差の許容範囲内と思われる。十段で構成され、5「明敏篤字事」の絵と6「聞持受法事」の詞の間、すなわち現状の第22紙のはじめに当たる部分に約十センチほどの不自然な空白があること以外、詞と絵の対応に特に異状はないように見える（「」内は各段の冒頭にある標題、その前の数字は段を示す）。ところが、料紙番号を追うと、二箇所欠失があることが判明する。

第1紙は料紙番号を欠いているが、一行目に「高野大師行状絵」の内題があり、さらに第2紙に「二」とあることから、これが本来の「一」であることは間違いない。第1紙の長さは四十七・九センチとはば標準であるが、改装時に端が切り落とされた可能性がないとは言えないし、あるいは巻頭で料紙の傷みが激しく、摩耗して見えなくなつたと考えられる。何れにしても、これは問題ではない。第2紙の

「二」から第15紙の「十五」までは順当に番号が続く。ところが、現状の第16紙には「十七」とあり、「十六」は欠番になっている。その後は再び順当に番号が続き、最後の第32紙は「卅三」となる。右のことから、本来の第16紙が欠失していることは明らかである。

では、そこには何が表されていたのであろうか。翻って料紙の表を見ると「十五」は3「四天王執蓋事」の絵の後半部にあたり、「十七」からは4「誓願捨身事」の詞が始まる。したがって「十六」には、第三段の絵の続きが描かれていたとしか考えようがない。第三段の事蹟内容は、朝廷から遣わされた問民苦使が、蓋を持った四天王が大師の後ろに従うのを見て驚き、馬から下りて礼拝し、さらに父母の家に「尋往」というものである。A本は画面右に礼拝の場面を、左に尋往の場面を描くが、現状の画面の最後、すなわち「十五」の左端には父母の家の門が描かれていることから、「十六」が門の内側を表すものであったことは想像に難くない。この場面について、前稿では次のように述べたが、ここで再検討しておく必要がある。

（前略）尋往の場面は白鶴美術館本にはなく、B本では図様が異なる。A本は「父母の家」を門だけで表し、その傍らに跪く父母と、そこへ歩み寄る勅使の一行を描いて「尋往」を示す。ところが、B本は門の内側に勅使と父を描き、「尋往」に続く「語云此児は……」に対応する場面を表す。さらに屋形内には、従者が大師の髪を梳るところを描くが、これは詞書には記述のない場面である。A本とB本は、このように図様は異なるが、強いて言うならば、勅使の来訪を描いていること自体に、白鶴美術館本とは一線を画する共通性が認められるように思われる。（後略）

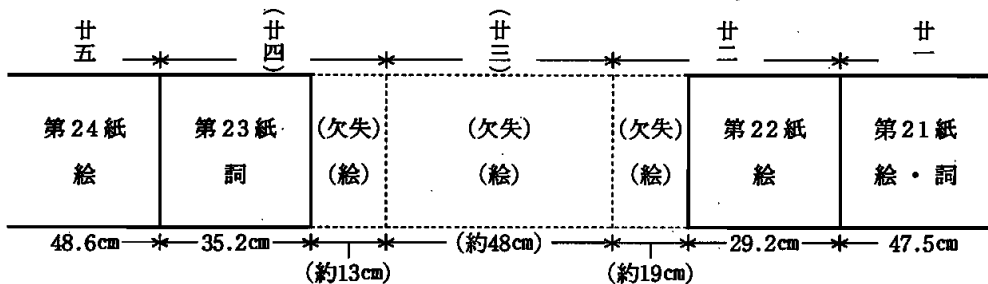
このように前稿では、A本とB本について、やや消極的に共通性を認めただけ過ぎないが、A本にも門内の様子が描かれていたとなると、両者の関係は現状よりも一段と密接になる。また前稿では、門の傍ら

に座る二人を大師の父母と見なしたが、突のところを言えば、勅使との対応があまり緊密ではないこと、門の正面ではなく傍らに左に続くなどに疑問がなかったわけではない。しかし、画面がさらに左に続くのであれば、門前の二人は単なる傍観者（従者あるいは路傍の見物人など）に過ぎず、父母は門の内側にいるという可能性も出て来る。その場合には、B本との共通性はさらに強いものとなるであろう。今回確認された「十六」の存在は、このようにA本とB本の関係を補強する点で、大いに注目される。なお「十五」の門前には紅葉が散らされているが、門の上方の空白になっている部分にも朱が点々と残っており、そこに紅葉の木が描かれていたことを窺わせる。

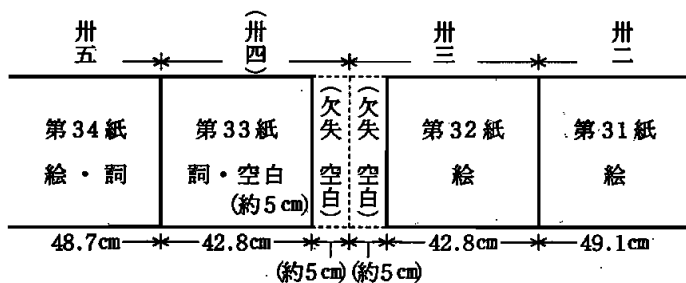
次に、現状の巻末に注目してみよう。先述の如く、最後の料紙には「卅三」と記されているが、第二巻と第三巻の最終紙の料紙番号を見ると、どちらも数字の後に「終」の字が添えられている。したがって「終」の字を持たない第一巻の「卅三」は本来の巻末ではなく、その後前稿で推定したように「書経降魔（桂谷降魔）」が表されていた可能性が高い。すなわち制作当初の第一巻は、巻末に「書経降魔（桂谷降魔）」を備えた十一段構成であったと考えられる。

〈第二巻〉 現状は三十六紙からなる。各料紙の横の長さは、標準よりも短い第22・23・28・32・33・36紙を除くと、四十六・二〇四十九・二センチの間であり、第一巻と同じく大半は四十八センチ前後である。九段で構成され、詞と絵の対応に大きな異状はないように見えるが、六枚の短い料紙のところに問題が生じている。

まず、第21紙までは問題なく展開する。ところが第22紙は二十九・二センチ、第23紙は三十五・二センチと他よりも極端に短い。しかも料紙番号を見ると、第22紙には「廿二」とあるが、第23紙にはなく、次の第24紙は「廿五」となぶ。したがって、現状の第24紙が本来の「廿五」であり、第23紙は「廿三」あるいは「廿四」の一部であった



挿図1 第二巻「廿二」から「廿四」までの復原図（点線が復原した部分）



挿図2 第二巻「卅三」と「卅四」の復原図（点線が復原した部分）

と推定される。ここで料紙の表を見ると、第22紙は6「望入洛事」の絵の後半に、第23紙は7「長安入洛事」の詞全文に、第24紙は同絵にあたる。詳細は次章で述べるが、第23・24紙の間には内容的な欠落はないと考えられるので、第23紙は本来の「廿四」であったと推定される。右のことから、仮に制作当初の料紙がすべて標準通りの長さであったとすると、「廿二」の後半、「廿三」の全体、「廿四」の前半、合計約八十センチ分の料紙が欠失していることになり、そこには6「望入洛事」の絵が続いていたと考えられる(挿図1参照)。

次に、第24紙の「廿五」から最終第36紙の「卅七終」までは、右の事情により現状の順番と料紙番号がひとつずつずれてしまいが、第33紙が料紙番号を欠くほかは、特に問題はない。第33紙には「卅四」が記されていたはずであるが、料紙が四十二・八センチと標準よりも短いことから、恐らく料紙番号ごと右端が切り詰められたものと推測される。その前の第32紙も同寸で短い、これには右上隅の裏に「卅三」の料紙番号があるから、切り詰められたとすれば左端の側である。このように考えると、現状の第32・33紙の間には合計約十センチの欠失が想定される(挿図2参照)。ところが、第32紙は8「五筆和尚号事」の絵の末尾、第33紙は9「虚空書字事」の詞を表すが、その間に内容的な欠落があるようには見えない。同様のことは他の短い料紙、すなわち第28・36紙の場合にも言える。第28紙(三十・二センチ)は7「長安入洛事」の絵の末尾に、第36紙(二十三・〇センチ)は9「虚空書字事」の絵の末尾にあたるが、ともに直前の料紙から絵が続いており、料紙番号もあるので、もし切り詰められたとすれば左端の側である。しかし、第28紙の絵と第29紙から始まる次段の詞との間に内容的な欠落は認められず、また巻末にあたる第36紙の絵は明らかに現状で完結している(詳細は次章で述べる)。

ところで、もう一度第33紙を見ると、右端に約五センチの空白が残

されていることに気付く。また、先述のように第一巻第22紙の右端にも約十センチの空白があり、後述するように第三巻にも同様の不自然な空白が認められる。このような空白の存在と右の事情を勘案すると、仮に、右の四紙が本来は標準の長さであり、後世に切り詰められて短くなったものであるとしても、切除された部分には元々何も描かれていなかったのではないかと思えてくる。むしろ、それ故に改装の際に切除されたと考えの方が自然ではないだろうか。勿論、料紙番号のある第28・35・36紙については、制作当初から短かったとも考えられるが、第33紙の場合、右端を欠失していることはほぼ確実である。なぜなら、もし当初から短かったのであれば、現存部分の右上隅の裏に料紙番号が記入されているはずであるが、それが無いということは、料紙番号の位置が、すなわち右端が切除されているとしか考えようがないからである。このことから類推して、他三紙についても同様に切り詰めが行われたものと考えておきたい。

〈第三巻〉 現状は三十七紙からなる。各料紙の横の長さは、標準よりも短い第23・34紙を除くと、四十六・七、四十九・四センチの間である。ただし、第一・二巻よりもやや長く四十九センチ前後のものが多い。八段で構成され、詞と絵の対応に異状はないが、先に述べたような空白が三箇所認められる。

一つ目は第21紙にある。右端に4「守敏遺護法事」の絵の末尾数ミリが覗いた後、5「道具相承事」の詞が始まる中央辺りまで、料紙の約半分が空白である。二つ目は第24紙の右端にあり、5「道具相承事」の絵と6「惠果御入滅事」の詞の間にあたる部分に約九センチの空白がある。三つ目は第35紙の右端にあり、7「惠果影現事」の絵と8「投三鉢事」の詞の間にあたる部分に約三センチ、わずかに詞一行分程であるが、やはり空白がある。

一方、料紙番号を追うと、第一紙の「一」から最終第37紙の「卅七

終」まで、第23・34紙が番号を欠く以外は、特に問題はない。第23紙（四十三・九センチ）と第34紙（十一・〇センチ）については、標準よりも短いので、第二巻第33紙の場合と同様に、番号ごと切り詰められたものと推測される。ただし、第三巻の料紙番号は左上隅の表にあるので、切除されたのは左端の側になる。ところが、第23紙は5「道具相承事」の絵、第34紙は7「恵果影現事」の絵のそれぞれ末尾にあたるが、どちらも次段の詞との間に内容的な欠落があるように見えない。さらに、その次段の詞のはじめ、すなわち第24・35紙の右端に、右で述べたように空白が残されていることに注目すると、ここでも切除されたのは元々空白だった部分ではないかと推定される。そう考えれば、第三巻には詞と絵の欠落は生じていないと言える。

さて、ここでは、料紙番号の検討により、制作当初の第一巻第「十六」紙と第「卅四」紙以降、および第二巻第「廿二」紙後半から第「廿四」紙前半まで、以上の部分が現状では欠失していることを明らかにした。また第二巻の現状第28・32・33・36紙、第三巻の現状第23・34紙については、その一部に料紙番号を欠くものがあることから、標準の長さに満たない部分は後に切除されたものと見なし、併せて、そこには元々何も表されていなかったと推定した。

では、この空白は何を意味するのであろうか。右で想定したものと現存する部分にあるものを合わせると、第一巻に一箇所、第二巻と第三巻に各三箇所の空白が存在する。それらに共通するのは、一つの例外を除き、他はすべて絵と次段の詞との間に位置することである。例外は第二巻の巻末であるが、これも絵の後という点では他と共通性を持つ。このように絵の後に空白があるという状態は、予定されていたスペースに対し、実際の絵が短かったことを示唆するものと言えよう。右のことは、A本の制作過程について、次のような推測を可能にす

る。すなわちA本の制作順序は、まず適当な間隔を置いて詞を書き、その間に絵を描いたものであると考えられる。なぜなら、逆に絵が先で詞が後であるならば、詞は絵のすぐ後から始まるはずであり、もし空白が生じるとしても、それは詞の後、つまり詞と絵の間になると考えられるが、実際には、そのような例は一つもないからである。しかし、空白の原因が、詞を書く際に間を広く取りすぎたのか、それとも絵が予定よりも短くなったのか、どちらによるものかは判断し難い。今はひとまず、結果的に絵が短かったという事実だけを確認しておくことにしたい。

二 図様比較—第二巻について—

前稿における第一巻の場合は、白鶴美術館本および日本と図様の比較を行ったが、第二巻の場合、B本には同じ内容の段が現存せず、また他に比較対象となるべき適当な作品もない。したがって、専ら白鶴美術館本とのみ比較することになるが、白鶴美術館本の図様が地藏院本と異なる段については、地藏院本も加えて検討する。また、第一巻では図様の相似と異同を主要問題としたが、結論から言えば、第二巻は全ての段において異同が顕著であり、相似性はきわめて乏しい。ここでは、むしろ両者の図様構成の相違に注目しながら、それぞれの特質を考察することにした。

なおA本第二巻の絵は全図を掲載したが（図1～9）、白鶴美術館本、地藏院本については、既に全巻掲載の図録が出版されているので、それらを参照された。

1 「天狗問答事」（図1）

室戸の崎の金剛頂寺で、住侶を悩ましていた天狗と問答し、それを退散させるために、自らの形代を作って桶の洞の中に置いたという事蹟を表す。

A本は画面右に寺の堂らしき建物を描き、そこに大師と四匹の天狗を配して問答の場面とする。左は画面の損傷が甚だしく図様の確認ができないが、岩と木立ちが描かれていたらしい。一方、白鶴美術館本も問答の場面を表すが、大師の姿勢や、天狗を羽の生えた鳥のような姿に描く点には共通性が認められるものの、建物が住房風の造であることや、天狗の数、配置には異同がある。また、A本の画面は料紙一枚を少し出る程度の短いものであるが、白鶴美術館本は料紙二枚を用いて、問答の場面のほか、その右に無人の堂、左に既に大師の形代を納めた楠を描く。さらに楠の前に庇を付け、その向いに礼拝堂らしき建物を添える。白鶴美術館本に準じて考えれば、A本の木立ちの中に楠があった可能性も考慮されるが、現状の画面を見る限りでは、その余地はないように思われる。したがって内容的には白鶴美術館本の方が詳しく、モチーフの相似もごく一部にしか認められない。

2 「久米寺塔事」(図2)

夢告を得た大師が久米寺東塔の心柱から大日経を発見し、その疑義を解くために渡唐を決心するという事蹟を表す。

A本では、この事蹟の中心となる塔は画面左に描かれ、その初層の内部に巻物をした大師の左横向きの姿が見える。塔は第二層まで描かれており、それより上は覆に覆われている。また画面右には、上方に寄せて本堂らしき建物が描かれているが、その上部も覆に隠されている。一方、白鶴美術館本の前半には別の事蹟の図様が窺入するという問題が生じているが、それはさておき、塔の部分にだけ注目すると、A本とは全く異なる多宝塔が描かれている。また、その中の大師自身はA本を左右反転した構図である。

ところで、この事蹟においては、以前指摘したように地藏院本と白鶴美術館本でも図様が全く異なり、地藏院本には、白鶴美術館本のよくな多宝塔ではなく三重塔が描かれている。ここで注目されるのは、

その第二層の屋根に覆がかかる辺りから下の部分が、ちょうどA本の図様に等しく見えることである。ただし地藏院本では、大師自身は白鶴美術館本と同じく右横向きであり、そのほか初層の右側面の戸が開いている点や、基壇の表し方、さらに塔以外の建物は描かれていないなどの点に、A本との相違がみられる。しかし以上三者を比較すると、白鶴美術館本が独り異なる図様であるのに対し、地藏院本とA本には強い相似性が認められる。

3 「渡海祈願事」(図3)

渡唐の前に、海上擁護を祈念して般若心経百巻を書写し、宇佐八幡宮に納めたという事蹟を表す。なお、この事蹟は地藏院本にはなく、第二巻の中では唯一の、十巻本系統における増補事蹟である。

A本は画面右に住房を描き、その中に写経する大師の姿を描く。左には宇佐八幡宮の本殿と拜殿を描き、拜殿の中に座して合掌する大師の姿を描く。一方、白鶴美術館本も画面右に写経の場面を描くが、住房の向きや大師の所作は大きく異なる。また宇佐八幡宮については、本殿はA本と強い相似性を示すが、拜殿はなく、大師の姿も表されていない。したがって「天狗問答事」とは逆に、A本の方が内容的に詳しい構成である。

4 「御入唐事」(図4)

延暦二十三年(八〇四)、大師三十一才の時、遣唐大使藤原實能とともに第一船に乗り、唐に向けて出帆したという事蹟を表す。

A本は画面右端を浜辺とし、そこに見送りの人々を描く。そして料紙一枚を波で埋めつくした後、遣唐使船を描き、その先に再び波を連ねる。大師と遣唐大使は船上の後部に設けられた船室内にいるのが窺から見える。一方、白鶴美術館本も画面右端を浜辺とするが、そこには人影はなく、岩と小松があるだけである。また、船をとりまく波の表現も、A本よりずっと簡略化されている。船については、帆の表現

はA本と同じであるが、細部の構造や船上の人々には異同が多く、大師と遣唐大使は甲板に設けられた櫓のような高台の上にいる。

さて、両者を比較すると、陸と海と船の位置関係は同じであるが、画面から受ける印象は大きく異なる。A本では、画面一杯に広がる波が、まさに唐までの遙かな行程を象徴するかのようであり、「片帆を飛ばし西におもむけば万頃の煙波眼前にきはまる」という詞書の一節に対応するのに対し、波を簡略化した白鶴美術館本では、その遙けさが薄らいでいるように見える。その点で、A本の方が詞書に忠実な構成であるとともに、豊かな表現力を発揮していると言えよう。また浜辺に見送りの人々を描いている点でも、A本の方が派景を活かした効果的な構成になっている。

5 「着福州事」(図5)

衡州(詞書には「衡州」とあるが、実際には「福州」が正しい)に着岸してから上陸を許されるまでの事蹟を表す。着岸後、遣唐大使は衡州の長に上陸許可を求める書を送るが、州長はそれを地に投げ捨て、返事も書かない。これが三度繰り返し返される間、船は封じられ、人々は浜辺の湿った砂の上に放置されていた。このような事態に困惑した大使は、大師の能筆を見込んで代書を依頼する。その書を見た州長は、今度は上陸を許可し、人々を懇ろに慰問したという。

以上の経緯を、A本は次の五場面を表す。

- ① 船を封じられ、人々が浜辺で困惑するところ。冒頭に描かれた遣唐使船は既に無人であり、波打ち際近くの柳の根方に大師と大使、さらにその周辺に僧俗合わせて十数名の人物を描く。
- ② 大使の使者が州長に謁見し、拒絶されるところ。椅子に座る州長の足元に、大使からの書が投げ捨てられている。
- ③ 大師が書を代筆するところ。画面上方に寄せて①と同じ柳を描き、その前に書を認める大師と、それを見守るような大使を描く。

④ 大使の使者が州長に謁見し、受け入れられるところ。②と登場人物もその配置も全く同じであるが、書は州長の手にあり、受理されたことが示される。

⑤ 州長が一行を慰問するところ。画面の左右と上方に幄舎を設け、右に大師と大使、左に州長を配して向い合わせ、上方にも一行の人々を描く。中央の卓には豪華な料理が盛りられ、童子が給仕する。A本は約三メートルもある長い画面に、①から⑤を延々と描き連ねる。派景が少ないうえに、①と③、②と④が類似した場面であるので、一見単調に感じられるが、このように事蹟内容を逐次的に絵画化する構成は、見る者にとっては大変分かり易いものである。ただし詞書には、大使は三度書を送り、州長は三度も投げ捨てたとあるが、画面上では②の一回に集約されており、同様の場面を繰り返すことは避けられている。

一方、白鶴美術館本は全く異なる構成であり、料紙一枚半にも満たない短い画面に、次の三場面を描く(図10)。

- ① 大使が州長に謁見し、拒絶されるところ。画面の左下に無人の遣唐使船があり、その右方の浜辺に束帯姿の大使と朱色の衣を着た州長が立つ。州長の手には大使からの書が広げられているが、その足元にも打ち捨てられた書が描かれている。つまりここには、読む場面と投げ捨てた後の場面(さらには、その繰り返しまでも)が重ね合わされていると考えられる。
 - ② 大師が書を代筆するところ。①の上方で、大師が書を認めている。その向いに緑色の衣を着た唐人が座っている。
 - ③ 大師と大使が、②の左方に描かれた建物の中で、向かい合って座っているところ。
- ところが、この白鶴美術館本の図様には、実はいくつかの問題点がある。まず、①では大使と州長が直接に対面しているが、正式な手順

から言えば、やはりA本の②のように使者が立てられるべきであろう。したがって、このような場面は実際にはあり得ないはずである。次に、②の唐人は誰であろうか。披り物は唐人のそれであり、この人物が唐人として描かれていることは間違いないが、①の州長とは衣の色が異なることから同一人物とは考えられない。しかし、ここで白鶴美術館本と同じ図様構成である地藏院本を見ると、①の州長と②の唐人は同じ面貌、同じ服装であり、明らかに同一人物として描かれていることがわかる。①に準じて考えれば、これはA本の③④に相当する内容を表す場面と見なされるので、図様としては地藏院本が正しく、白鶴美術館本は彩色を誤写したものと推定される。けれども、この唐人が州長であることが判明したとしても、書を認めている大師の前に、州長その人が座っているという設定は如何なるものであろうか。厳密に言えば、大師の書は認められた後、大使から使者を通じて州長に届けられるべきものであるから、②の設定内容には、かなりの無理があるように思われる。また③については、対応する内容を詞書の中に見い出すことができない。大師と大使が向き合っていることに注目すれば、代書の依頼をするところなどが考えられるが、それは浜辺での事蹟であり、二人が建物内にいるのは不自然である。強いて推測するならば、一行が上陸を許された後の様子を描いたものと考えられるが、次段には「仮屋」を作って一行を住ませたとあり、その「仮屋」にしては建物が立派過ぎるという矛盾がある。

さて、右の問題はともかくとして、両者の図様が全く異なることは一目瞭然である。まず、A本は詞書に従って一つ一つの出来事を逐次的に、かつ忠実に絵画化する。右から左へと直線的に展開する画面構成も甚だ合理的である。一方、白鶴美術館本は（そして地藏院本も）事蹟の要所だけを抄出し、それらを適当に組み合わせて場面を構成する。すなわち、①では書を認めた大使、それを読む州長、打ち捨てられた

書、また②では書を認める大師、後にそれを受理するはずの州長というように、本来はいくつかの異なる場面のモチーフとなるべきものを、一見一場面のように見える描写の中に重層的に描き込んでいく。つまり複数の場面内容を「一場面」に集約することにより、実際にはあり得ない場面を合成するのである。ここには、図様構成に対する両者の意識の相違とも言うべきものが最も顕著に示されていると言えよう。

6 「望入洛事」(図6)

大師が入洛を請う書を州長に送り、州長はそれを長安に送る。また州長は「仮屋」を作り、大使や大師を住ませたという事蹟を表す。この段は、白鶴美術館本の第六段「入唐入洛事」の前半に当たり、次の7「長安入洛事」がその後半に当たる。つまり白鶴美術館本が一段で表す内容を、A本は二段に分割して表しているのである。白鶴美術館本の絵は、どちらかと言えば、7「長安入洛事」と類似した内容であるので次段で検討することとし、ここではA本の絵だけを見ることにしたい。

A本の画面には、網代で囲まれた堀立小屋のような仮屋がいくつか描かれており、左端のそれに大師が、その右の仮屋に大使が座している。現状は料紙一枚分程度の短い画面であり、極めて簡潔な図様構成である。しかし、先述の如く料紙番号の検討結果からは、この絵の末尾と次の7「長安入洛事」の詞との間に約八十センチの欠失が想定され、そこには6「望入洛事」の絵が続いていたと推定される(挿図1参照)。では、欠失した部分には、一体何が描かれていたのであろうか。ここで、詞書の全文を見てみよう。

大師、又かさねてみやこに入給んことをのぞむよしの書をつくりて、州長にあたふ。州長、これをもちて長安に奏す。卅九箇日を経て、府州府力使四人をたまふ。かつく資糧を給ふ。州長もしみを成てねむごころに問尋ぬ。仮屋十三煙をつくりて、大使并に

大師をすへたてまつる。

現状の画面は詞書の最後の一文に対応する場面と見なされる。しかし、仮屋の中の大師の視線は左方に向けられており、確かにその先に何か見るべきものがあつたように思われる。そこで敢えて想像を巡らすならば、まず、合計十三になるように、さらに仮屋が描かれていたことが考えられる。あるいは、仮屋が作られたのは「着福州事」で上陸が許された直後であると考えれば、詞書の冒頭に戻って、大師が書を認めるところ、同じく送るところ、あるいは書を受け取る州長、さらには府力使四人と資糧が届くところなどが描かれていたと推測することも可能であろう。それを確かめる術は今はないが、何れにしても、この段には、現状の画面も含めて、白鶴美術館本には全く描かれていない場面が展開していたことだけは確かである。

7 「長安入洛事」(図7)

五十日後(白鶴美術館本では五十八日後)、存問勅使を賜わり、次いで迎客使を賜わり、長安に迎え入れられて、大使は宣陽坊の官宅に、大師は西明寺の永忠和尚の故院に住せられるという事蹟を表す。

先に第二章(第二巻)の項において、この段の詞の料紙(現状の第23紙)と絵の一枚目の料紙(現状の第24紙)の間には「内容的な欠落はないと考えられる」と述べたが、はじめに、この点を確認しておく。A本の冒頭には、大師と唐人が礼を交わすところが描かれており、これは存問勅使を賜わる場面と見られる。ところが、その背景には前段と同様の仮屋があり、前段からの強い連続性が示されている。したがって、これより以前に他の場面があつたとは想定し難く、これをこの段の第一場面であると考えてよいであろう。

さて、続いて左向きに進む三頭の馬が登場する。鞍は置かれていますが、誰も乗っていないので、この時点では、一行の出発はまだこれからかと思わせる。馬の前を進む人々につられて視線を左へ動かすと、

東帯姿の大使が目に入る。その前方には楽人が列をなし、さらにその先に、持幡童子に先導された大師の姿がある。その行く手には既に長安の城門が聳え立ち、甲冑に身を固めた武人たちが厳しく警護している。この間、画面にして約二メートル余り、第一場面は福州で展開していたはずなのに、いつの間にか長安に到着していたという構成に仕立て上げられている。これは連続画面構成の絵巻の常套手段であるが、ここでは、出発前の場面と到着の場面の間に行列を配することにより、空間移動と時間経過が実に巧みに処理されている。

また、詞書には「長安入京の粧ときつくすべからず」とあるが、行列に持幡童子や楽人を加えたのは、その盛儀を表すためであろう。同様に、画面上方に描かれた老若男女の見物人十数名は、詞書の「見るもの八重なみにして盛る市のごとし」に対応する表現であると思われる。なお、この段の絵の最終紙(現状の第28紙)は、先に指摘したように、標準よりもやや短い。しかし、現状の画面は城門で終っており、その内側、すなわち画面末尾の左上方には何も描かれていないことから、絵は現状で完結していると考えてよいであろう。

一方、白鶴美術館本は、画面右上方に寄せて前段すなわち5「入唐着福州岸事」の第三場面と類似した建物を描き、その中の一室に大使を、また別の一室に大使を配する。したがって、これはA本の6「望入洛事」と同じく、福州での場面のように見える。ところが、ここで同じ構成である地藏院本を見ると、大師のいる建物には「西明寺永忠故院」、大使のいる建物には「宣陽坊官宅」の書き入れがなされており、もはや福州ではなく、長安に到着した後の場面であつたことがわかる。しかし、その左には画面上を左へ進む遣唐使の一行が描かれており、これは福州から長安へ行く途中の場面と見るはかない。地藏院本と白鶴美術館本では行列の様子に多少の異同が生じているが、馬に乗って先導する唐人の後に、同じく騎馬の大使と大師が続く点は同じ

である。このような地藏院本と白鶴美術館本の構成には、二つの場面の前後関係が、絵巻にとって通常の展開である右から左へとは逆に異なるという問題がある。むしろ地藏院本の書き入れを無視して、はじめに推定したように右上の情景を福州での場面と考えた方が、画面上の展開には無理がないように思われる。ただし、何れにしてもA本と全く異なる図様であることにはかわりがない。

さて、A本と白鶴美術館本を比較すると、行列の場面には辛うじて内容の類似性が認められるが、一方は早くも長安到着の場面を表すのに対し、他方は未だ遙かな道のりの途次であり、その差は大きい。また、A本は詞書に盛り込まれた情景描写を意識的に絵画化し、それによって華やかな画面を演出するが、白鶴美術館本の描写は、厳密に言えば詞書には語られていない場面を表わしたものである。構成においては、直線的な展開を示すA本に対し、白鶴美術館の展開は二つの場面の前後関係がわかりにくい。したがって、A本の方が詞書に忠実な、また添景を効果的に配した構成であると言えよう。

8 「五筆和尚号事」(図8)

唐の帝の勅命を受けて宮中の壁に書をなし、五筆和尚の称号と菩提子の念珠一連を賜わるといふ事蹟を表す。

A本は画面の左右に建物を描き、右に詞書通りに左右の手足と口に五本の筆を持ち、壁に向かう大師の姿を描く。その後方に玉座があり、周囲に廷臣たちが侍る。左には大師が帝から念珠を賜わる場面を描く。なお、この段の最後の料紙(現状の第32紙)は標準より約五センチ短いが、建物は左端まで描かれており、その周囲には何の添景もないので、絵は現状で完結していると考えられる。

一方、白鶴美術館本も同じ内容の二場面を描くが、第一場面に帝の姿はない。背景となる建物の構造や周囲に侍る廷臣の描写にも異同がある。しかし、第一場面の大師、また第二場面の大師と帝は、左右反

転させるとA本と似た図様になり、わずかではあるが、モチーフの類似を窺わせる。

9 「虚空書字事」(図9)

文殊菩薩の化身である童子に勧められ、虚空と流水に文字を書くという事蹟を表す。はじめ大師が虚空に字を書き、次に同じように童子も書く。また流水に大師は詩を、童子は「龍」という文字を書くが、童子が書き落とした小点を、勧められて大師が打つと文字は忽ち「真龍」となって昇天したという。

A本は画面右上から左下にかけて流水を描き、此岸に、右から順に次の四場面を描く。

- ① 大師が虚空に文字を書くところ。
- ② 童子が虚空に文字を書くところ。
- ③ 童子が流水に文字を書くところ。
- ④ 文字が「真龍」となって昇天するところ。筆を手にした大師が、これを見上げている。

大師と童子をそれぞれ二回ずつ描き、①②で虚空書字を、③④で流水書字を表す構成である。事蹟の展開から言えば、②③の間に大師が流水に詩を書く場面があつてしかるべきであるが、これは表されていない。①から④への展開は、水の流れに沿って、と言うよりも、この水の流れ自体が右から左へという絵巻の本質的な展開性に合致したものであるから、こうした二重の左向きに導かれるようにして、滑らかに進んで行く。人物が全て左向きであることも、それを助長するように見える。なお、最終の料紙(現状の第36紙)は標準の約半分の長さしかないが、波が消えた後の左端に少し余白が残っていることから、現状で絵が完結していることは明らかである。

一方、白鶴美術館本は、逆に画面左上から右下にかけて流水を描き、彼岸に大師と童子を二回ずつ描く。右の虚空書字の場面は、A本の①

の大師に、②の童子を左右反転したものを向かい合わせたような構成である。そのため本来は①の次に②が展開する内容であるのに、画面上では、①②がまるで同時に進行するかのように見える。これは、5「入唐着福州岸事」で指摘した場面の合成と同質の表現である。また左の流水書字の場面については、大師と真龍はA本の④に近い表現であるが、童子は大きく異なり、立ち姿で大師と同じく真龍を見上げてゐる。つまり童子もA本の④に相当する場面に加わっているものであり、白鶴美術館本にはA本の③に相当する場面は描かれていない。

さて、白鶴美術館本では、このように虚空書字の事蹟は一見一場面であるかのように描かれ、また流水書字の事蹟は文字通り一場面に集約して表されている。これに対し、A本は二つの事蹟をそれぞれ二つずつの場面で表し、それらを右から左へ直線的に並置する。なお①②については、白鶴美術館本と同じように合成された一場面と見ることと可能であるが、同じ姿勢をとる二人は、その姿と同様に並列的な存在であるに過ぎず、画面上での相互関係は極めて希薄である。このような両者の相違は、先の5「着福州事」と同じく、A本が詞書に沿った逐次的な構成を意図するのに対し、白鶴美術館本は事蹟の要所だけを捉えた集約的な構成をとることに由来すると言えるであろう。

A本第二巻の図様について、白鶴美術館本と、また部分的に地藏院本と比較した結果は以上の通りである。次章では、右の結果を踏まえ、A本の図様構成の特質を考察することにした。

三 「高野大師行状絵」の特質—第二巻から—

まず、A本と白鶴美術館本の関係についてまとめてみよう。前章のはじめに述べたように、第二巻においては、両者の相似性は極めて乏しく、画面全体が相似する段は皆無である。しかし、1「天狗問答事」、

2「久米寺塔事」、8「五筆和尚号事」、9「虚空書字事」の場合は、左右反転するものもあるが、一部の人物の姿態に、あるいは3「渡海祈願事」の場合は、宇佐八幡宮の本殿に、それぞれ部分的に相似性が認められる。また4「御入唐事」の場合は、陸と海と船の位置関係は共通するものの、人物表現には異同が大きい。残る5「着福州事」、6「望入洛事」、7「長安入洛事」の三段は全く異なる図様である。このような第二巻にあっては、相似性よりもむしろ両者の表現の相違にこそ注目すべきであるように思われる。

では、両者の相違を改めて検討してみよう。1「天狗問答事」では、白鶴美術館本の方が画面が長く、A本よりも詳しい構成になっていた。しかし、これは例外的なものであり、他の多くの段では、A本の方が詳細な内容を表している。例えば3「渡海祈願事」では、白鶴美術館本は大師を一回描くのみであるが、A本は二回描いて二つの場面内容を表す。また4「御入唐事」では、大師自身の表現には大差ないが、浜辺に見送りの人々を添えることにより、陸にも事蹟内容に関わる意味が与えられている。

だが、両者の特質を最も顕著に表しているのは5「着福州事」であろう。先に述べた如く、ここでは、A本は詞書に従って事蹟の展開を忠実に絵画化しようとするが、一方の白鶴美術館本は事蹟の要所だけを抽出し、それらを適当に合成して一つの場面のように見せかける。前者が言わば「逐次的な構成」をとるのに対し、後者は「集約的な構成」を指向するのである。同様のことは、9「虚空書字事」についても言える。また、白鶴美術館本の第六段「入唐入洛事」を二分割した6「望入洛事」と7「長安入洛事」は、どちらも白鶴美術館本とは異なる独自の場面を表すが、より多くの事蹟内容を表すという点で、これも右の「逐次的な構成」と軌を一にするものと見ることができ。さらに7「長安入洛事」の行列の描写には、詞書に記された華やかな

情景を絵画化しようという意図も窺える。

さて、前稿では、A本を十巻本系統の改訂版と位置付け、その改訂に際して留意された事項として、①事項内容の充実、②詞書の忠実な絵画化、③全体的な形式の整備、以上三点を予測的に挙げた。右で述べたA本の特質は、まさにこの予測の①②に合致するものである。なお、③は前稿で検討した目次と標題の一致等の問題であり、本稿では言及しない。

次に、A本と地藏院本の関係を見てみよう。前稿で指摘したように、A本は詞書や構成の一部において、白鶴美術館本よりも地藏院本と密接な関係を示す場合があった。第二巻の図様については、同様のことが2「久米寺塔事」に指摘できる。この段には、白鶴美術館本の図様に錯誤があるという特殊な事情があるが、このような問題のある段で、A本が白鶴美術館本よりも地藏院本に相似するという事実は極めて興味深い。

以上のことから、A本第二巻の図様については、第一巻とは異なり、白鶴美術館本との相似性はかなり微弱であることが確認された。では、A本第二巻の図様の大部分は、独自に創作されたものであろうか。比較作品の乏しい現状では、この問題については想像を巡らすはかないが、一つの憶測を述べてみよう。例えば、第一巻が白鶴美術館本だけでなくB本という別系統の図様を多く取り入れていたように、また第二巻でも一部に地藏院本系統の図様が入り入れられているように、第二巻の他の段についても、白鶴美術館本以外の先行本が参照された可能性は充分あると考えられる。

右の問題に関連して注目されるのは、第二章で指摘したように、絵と次段の詞の間に不自然な空白が数カ所存在することである。これにより、本絵巻の制作過程は、詞が先で絵が後であると考えられることは既に述べたが、その場合、絵師に求められるのは、詞と詞の間に残

されたスペースに、ちょうど納まるように絵を描くことであつたはずである。ところが現状を見ると、絵師は一部においてその調節に失敗したのがわかる。このような事情を勘案すると、この図様は絵師自身が創作したものではなく、既成の図様を転写した可能性が高いように思われる。なぜなら、もしも絵師自身が創作したものであるならば、予め考案した図様がスペースに適合しない場合には、改めて修正すればよいことであるのに、この絵師はそれをしていないからである。このことは、絵が自らの創作ではなかったことを示すものではないだろうか。しかし一方、既成の図様があつたのなら、詞を書く際に何故それに合わせたスペースを残さなかつたのかという疑問もあり、この問題の結論は早急には出せない。ただ、ここでは、現存作品の中に先行図様が見い出せないものについても、これに該当する作品が存在した可能性を捨て難いことを指摘しておきたい。

最後に、前稿と同じく、A本と東寺本の関係を見ておこう。A本第二巻全九段のうち、東寺本に対応する事項がないのは3「渡海祈願事」のみである。他八段については、内容に多少の改変が加わる場合はあるものの、ほぼ同様の事項が東寺本にも収録されている。その中で、この両者だけに共通する描写として、次のものが挙げられる（東寺本についてはローマ数字で巻を、算用数字で段を示す）。

2「久米寺塔事」と東寺本II-8「久米感経」 東寺本の塔は白鶴美術館本と同じく多宝塔であるが、画面右上方に描かれた本堂らしき建物は、A本とのみ共通するモチーフである。上方を覆う覆われていた点も一致する。ただし、A本では扉は閉ざされているが、東寺本ではすべて開け放たれており、彩色も異なる。

5「着福州事」と東寺本III-2「大使替書」・3「長安奏聞」 東寺本の「大使替書」は四場面からなり、第一場面で大使が書を認めて

いる点を除くと、A本の①④に相当する内容を表す。いずれの場面も人物の配置や姿態には異同が多いが、このような四場面構成とすること自体に両者の共通性が認められる。③を画面上方に寄せる場面配置も同じである。A本の⑤に相当する場面は、東寺本III—3「長安奏聞」の前半に見い出される。「長安奏聞」の詞はA本の6「望入洛事」に相当する内容であるが、絵は州長が遣唐使一行をもてなすところであり、その前半にA本と同様の糧舎を立て並べた情景が展開する。ここでも人物の配置などには異同が多く、またA本に見られた中央の御馳走を盛った卓は東寺本には描かれていないが、糧舎の描写には強い相似性が認められる。

7「長安入洛事」と東寺本III—4「存問勅使」冒頭に大師が存問勅使を迎える場面を描き、続いて長安へ向う一行、さらにその行く手に、城門を構え、警護の兵を描く点に共通性が認められる。ただし背景となる飯屋の表現や勅使の姿、周囲の人物には異同が多い。特に行列の場面は、東寺本は勅使、遣唐大使、遣唐副使、大師の順に騎馬で表し、A本とはかなり異なる表現である。その点では白鶴美術館本に近いと言えるが、路傍に見物人を配する点はA本と共通する。したがって東寺本は、全体構成についてはA本を踏襲するが、細部の表現については、白鶴美術館本も取り込み、両者を折衷しながら独自の図様を構成したもののように見える。

8「五筆和尚号事」と東寺本IV—7「宮中壁字」A本の二場面ともに、東寺本でもよく似た構図で描かれている。第一場面の帝の向きが変わり、庭にも従者が控えていること、第二場面に従者がいないこと、また東寺本は二つの建物の間に前方へ、すなわち画面上では下方へ向けて廊のようなものを張り出すこと、庭に水流を加えることなど、種々の相違はあるものの、基本的な構成の相似性は明らかである。強いて言うならば、A本が建物と人物だけの簡潔な構成であるのに対し、

東寺本は添景を加えた修飾的な構成になっている。
9「虚空書字事」と東寺本II—8「流水点字」事蹟内容に大きな異同があり、人物の描写にも異同が多いが、背景すなわち流水を画面右上から左下に配する構成と彼岸に険しい岩山を描く点に共通性が見られる。

以上のことから、第二巻についても、A本の図様は東寺本に少なからぬ影響を与えたと推測される。けれども、東寺本はA本の図様をそのまま取り入れるのではなく、例えば「存問勅使」の場合のように他本の図様と合成したり、あるいは「宮中壁字」の場合のように添景を加えるなど独自の改変を施す。その点では、前稿で述べた第一巻よりも第二巻の右の例の方が、先行図様を巧妙に消化していると言えよう。

結 語

本稿では、まず、料紙番号の検討からA本の現状に欠失があることを明らかにした。次に、A本第二巻の図様を白鶴美術館本および部分的に地藏院本と比較し、A本の図様構成の特質を分析した。さらに、A本と東寺本にのみ共通する図様を抽出し、前稿で指摘したように、A本を東寺本が参照にした先行本の一つとして位置づけられることを確認した。

ところで、前稿脱稿後、鹿島蘭氏によってA本に関する論考が発表された。鹿島氏は、A本と白鶴美術館本の詞書を比較した結果、「両本ともに詞書を書写する際におかした誤謬を見いだすことができた」とし、このことから「両本に先行して十巻本の祖本があったとはほぼ確信するに至った」と述べ、さらに「既に亡失したと思われる十巻本の祖本を、かなり忠実に写し伝えた系統の一本が白鶴美術館本であり、かなり転写に際し改変されて伝わったものが三大寺本系『高野大師行状絵』であるということができよう」と結論された。鹿島氏の比較方

法は、主としてA本と白鶴美術館本の詞書の異同部分を列挙するものであるが、個々の事例についての具体的な言及が乏しく、論拠が明瞭であるとは言いがたい。また、転写の際に加えられたという「改変」についても、何を指すのか説明が不十分である。しかし、その結論はひとまず妥当なもののように思われる。

さて、十巻本系統に白鶴美術館本以前の祖本が存在する可能性については、かつて別の理由から筆者も言及したことがある^(註)。しかし、この問題は決して容易ではない。祖本を想定するにあたっては、そこに何を求めるのか、換言すれば、その祖本の内容を如何なるものに想定するのが重要な課題となる。これを明らかにしなければ、祖本を想定する意味はないであろう。十巻本の場合、特に問題となるのは、地藏院本と白鶴美術館本に代表される六巻本と十巻本の関係、すなわち前者を増補したものが後者であるという関係が前提となることである。この両者間に認められる数々の異同については既に指摘した通りであるが、十巻本の祖本を想定するならば、当然のことながら、それは地藏院本(の祖本)と白鶴美術館本の間位置付けられることになり、その内容は、この両者の異同の振幅の中に納まるものでなければならぬ。

ところが、前稿で述べたように、A本の特殊性は、内題・目次・標題、詞書、構成、図様ともに、地藏院本と白鶴美術館本の間からはみ出す要素を持っている。したがって、たとえ白鶴美術館本とA本に共通する祖本を想定したとしても、A本の異同の多くの部分については、その出所を祖本に帰することはできないのである。筆者が、A本を十巻本の「改訂版」と位置付けたのはまさにこのためであった。そしてA本にとって重要なものは、むしろ、A本自身が他本の要素を取り込んだ可能性や、あるいは独自に改変を加えた可能性を考慮しながら、そのはみ出した要素について考究することであろう。この問題について

は、また結論を出すことはできないが、第三巻以降の検討とともに、続稿で改めて論じることにした。

(注)

- 1 武田恒夫先生古希記念会編『美術史の断面』所収、清文堂出版、平成七年一月。
- 2 A本に関する先行論文は次の通りである。Robert T. Paine, Jr. The Life of Kobo, A Japanese Painting of the 14th Century, Bulletin of the Museum of Fine Arts, vol. XXXVI, December 1938. 田口信行「三太寺氏の高野大師行状絵」『画説』四四号、昭和十五年。梅津次郎「高野大師行状絵の零巻について」『國華』七五二号、昭和二十九年。佐野みどり「高野大師行状絵巻断簡」『國華』一〇六三号、昭和五十八年。宮次男「在米の弘法大師伝絵巻について」『原色日本の美術27在外美術(絵画)』『小学館』昭和五十五年。鹿島蘭「三大寺本系高野大師行状絵について」『仏教芸術』二一四号、平成六年。
- 3 前稿執筆時、第二巻と第三巻の料紙番号については確認していたが、第一巻については初回調査時に見落とししていたため、第一巻を中心とする前稿では敢えて言及しなかったものである。その後、逸翁美術館の伊藤ミチ子氏の御好意により再調査の機会に恵まれ、今回発表するような新知見を得ることができた。
- 4 料紙番号が書き入れられた時期については、制作時、あるいは制作以後で現状への改装以前、以上二通りの可能性が考えられる。しかし、第三巻の料紙表に番号が書かれていることに注目すると、このような番号の打たれている面を表にして新たな絵巻を制作するとは思えないので、ここでは、後者であると考えておきたい。
- 5 A本は全体的に傷みが激しく、料紙に掠ったような跡があるほか、絵の具の剝落も目立つ。特に、この「十五」の左端は掠れがひどいが、これについて

- ては、むしろ「十六」の欠落と関連して、この部分の絵を故意に消した可能性もあるように思われる。
- 6 第三巻第29紙は、実は途中に切れ目がある。それは6「惠果御入滅事」の詞と絵の間にあたり、右(詞)の料紙の横の長さは二十八・二センチ、左(絵)は二十・三センチである。合計すると四十八・五センチになり、料紙一枚分の標準に相当することから、本来は合わせて一紙であったと考え、本稿では復原した状態で数えることとした。
- 7 第23・34紙には建物が描かれているが、その左端まで表されていることから、絵は現状で完結していると考えられる。なお第三巻の図様については、続稿で検討する予定である。
- 8 第一巻第「十六」紙、第二巻第「二十二」紙後半から第「廿四」紙前半までの部分についても、当初から空白であった可能性がある。しかし、このように広い空白が制作当初からあったとは考え難く、第一巻については、B本との類似を考慮して前述のように推定した。第二巻については、次章で述べる。
- 9 地藏院本については山本智教・真鍋俊照監修『高野大師行状図画』(大法輪閣美術部、平成二年)、白鶴美術館本については梅津次郎編『弘法大師伝絵巻』(角川書店、昭和五十八年)参照。
- 10 地藏院本は白鶴美術館本とはほぼ同じ構成であるが、稿の前に庇と礼拝堂を設けない。拙稿「弘法大師伝絵巻の諸問題」(『国際交流美術史研究会第八回シンポジウム 説話美術』国際交流美術史研究会、平成二年)68頁参照。
- 11 注10拙稿、69〜70頁参照。
- 12 同前。
- 13 存問勅使を賜わるのは、実際には長安城外のことと思われるが、画面上では、前段と同じ場所に描かれている。
- 14 ③④の場面は安楽寿院蔵「高祖大師秘密縁起」にも描かれている。
- 15 注2鹿島論文、53・56頁。

- 16 注10拙稿、66—67頁。
- 17 同前。

(付 記)

総持寺本の調査にあたっては、総持寺真主濱野堅照氏、ならびに平山堂の高橋泰平氏の御高配にあずかりました。また本稿をなすにあたり、逸翁美術館の伊藤ミチコ氏、白鶴美術館の山中理氏のお世話になりました。記して謝意を表します。

On the *Kōya Daishi Gyōjō-e*, Formerly in the Sāndaiji Family Collection

—Sōjji version—

Kimiko SHODE

This set of narrative scrolls contains the first five scrolls of what is thought to be a complete set of ten. It belongs to the category of Ten Volume versions within the group of narrative scrolls that tell the biography of Kōbō Daishi Kūkai. Due to differences in composition and style from the Ten Volume versions, however, it has been considered more appropriate to classify it separately. This author has researched the set of scrolls as a whole, and also investigated the style of the first scroll in the set. As a result, it is clear that this set of narrative scrolls is a revised version of the Ten Volume set, and also that it influenced the *Kōbō Daishi Gyōjō-akotoba* in Tōji. The present paper continues and augments the author's previous research to investigate the topic of the numbering of the sheets of paper with which the scroll is constructed, and also considers the style of the second scroll.

(右下へ続く)

図1 第二巻第一段 天狗問答事

図2 第二巻第二段 久米寺塔事

図3 第二巻第三段 渡海祈願事

図4 第二卷第四段 御入唐事

図5 第二卷第五段 着福州事

図6 第二卷第六段 望入洛事

図10 白鶴美術館本 第二巻第五段 入唐着福州岸事

図7 第二巻第七段 長安入洛事

図8 第二卷第八段 五筆和尚号事

(右下へ続く)

図9 第二卷第九段 虚空書字事